

目次

序章

7

第一章 怪魚とは

19

怪魚の定義／世界的巨大魚ハンター・ヤコブとの出会い／海の巨大魚と怪魚の違い／古代魚の魅力／魚類の約一割を占めるナマズ／魚の年齢を知る方法／怪魚大国アマゾンと怪魚空白地帯の「王」／利根川や琵琶湖にも怪魚はいる！／釣りと狩りの線引き／深海魚という新たなフロンティア

第二章 怪魚を探す

51

金なし、コネなし、情報なしの旅／僻地を釣り歩くコツ／釣果に直結するコミュニケーション／「河口」と「濁った水」には魚が集まる！／「流れ込み」と「マンメイド」で釣る！／失敗体験は貴重な情報源／ムベンガをめぐる冒険／深海魚を探すには／徹底したシミュレーションが自信を生む

第三章

怪魚を釣る

怪魚は誰にでも釣れる／釣り道具選びの基本／大きな魚ほど個人主義者？／「いいルアー」の条件／ニ〇キログラムの怪魚・タイメンとの格闘／世界最大の有鱗淡水魚・ピラルクー／満身創痍で釣り上げたムベンガ／「幻」の割にあっさり釣れたディンディ／傷を残さずに魚を逃がす方法／怪魚釣りは危険か

79

第四章

深海魚釣りと世界の釣り文化

深海魚釣りにおけるクリエイティビティ／マイナス理論でベニアコウを釣る／メカジキを「輪」で捕る／驚くべき現地釣法／釣りをステイタスとする文化／釣り大国・日本／釣りの天才たち／負けず嫌いで人間臭いヤコブ

113

第五章

キヤッチ・アンド・リリースと食すこと

これまでに出会った強い魚／魚を撮影する／ある怪魚の死／生きて戻すことができない深

141

海魚／死なせてしまった魚はすべて食す／旨い魚とは？／部位によって変わる怪魚の味／
二度と食べる気がしないウミウシ／怪魚をさばく／深海魚は旨いのか

第六章

人と自然、そして怪魚

怪魚を取り巻く状況の変化／実は減っているブラックバス／ブラックバスは本当にワルモノなのか／人間が変えてしまった環境／魚を科学する

169

第七章

これから先の「未知」

怪魚釣りのフロンティアはどこにあるのか／高地釣りという新たな挑戦／冒険は日常のすぐそばに／幻の青い宝石を釣る／川の王・イートングーシーダダ／現地名で呼ぶのか、学名で呼ぶのか／新たな挑戦

189

おわりに

211

序章

水面を割り、躍り上がった巨軀は、夕焼けの空に弧を描いて、ドッパーンと落ちた。金色の水しぶきが湖に飛び散る。

「ぐおおおお！」

自然と声が出てしまう。相手が大きく頭を振るたびに、体ごと湖へ持っていかれそうになるのをなんとか堪えて力の限り足を踏ん張る。直径約二・五ミリメートル、スパゲティほどの太さがあるナイロン糸が、まるでゴムバンドのように伸縮しているのを掌に感じる。糸は鞭のようにうねりながら水面へ吸い込まれていく。日本から持参した釣竿やリールは用を成さなかった。体長一メートルを超える怪魚を釣り上げるには、手元にあった最も強い、この糸で手釣りする以外に術がない。やがて糸が反時計回りに水面を切り進み、左前方の浅場へと進んでいく。チャンスだ。

「うらあ！」

僕が大声を上げながら水の中へ飛び込むと、魚は水面にゴボゴボッと引き波を残し、泥砂を巻き上げながら加速して、水深二〇センチメートルほどの浅場に自ら突っ込んでいった。すかさず馬乗りに飛びかかり、巨体を押さえ込む。エラを傷つけないようにロープ



釣り上げたピラルクーを抱きかかえる著者

を通し、水の浮力を活かしてもう少し浅場に移動させた後、カメラを取りに走った。

自分より大きな魚を釣りたいという、幼少期から抱き続けた夢が実に実現したのだ。しかし、浮ついた思考の大半を占めていたのは、不思議な哀しさだった。念願が叶う瞬間というのは、もつとうれしいものだと思っていたのに。

その数秒後、僕は哀しみの正体を知ることになる。水面に巨軀を露わにしたピラルクーは、僕の腕の中で、その目から命の色を消していたのだ。

自分のライフワークである怪魚釣りについて

て人に説明するとき、僕はこのピラルクーのエピソードを話すことが多い。巨大魚との激しい格闘と、それを釣り上げたときの喜び、そしてその命を奪ってしまったときのやりきれない哀しみ……ピラルクーとの数十分間の闘いには、怪魚釣りの醍醐味と葛藤が集約されていくように思えるからだ。

しかし、本書を手にとった読者の中には、そもそも「怪魚」がどんな魚なのか皆目見当がつかない方も多いだろうし、著者である僕が何故、怪魚釣りをライフワークとしているのか不思議に思う方も少なからずいることだろう。そこで本章では、少しディープな怪魚の世界へ足を踏み込んでいただく前の準備運動と自己紹介を兼ねて、僕が「怪魚ハンター」と呼ばれるようになるまでの経緯を簡単に綴っておきたいと思う。

僕はこれまで、体長一メートル、もしくは体重一〇キログラムに成長する淡水巨大魚を釣ることを「怪魚釣り」と称し、ライフワークとしてきた。これまでに旅した国は四〇カ国以上、釣った怪魚は五〇種類を超える。

「最初に釣った魚は何ですか？　それが今の怪魚釣りにつながっているんですか」と聞か

れることがある。しかし、あいにく記憶は曖昧だ。ただ、子どもの頃から魚への興味は極端に強かった。

人生で初めて釣りをしたのは、おそらく一歳の頃だ。父がダンボール紙にクリップをつけて魚に見立ててくれたものを、磁石をつけた園芸用の棒で釣って遊んでいた。二歳になると、親戚からもらった魚釣りのおもちゃで遊ぶようになり、三歳くらいで、実際に釣り場デビューした。実家のある富山県高岡市は自然豊かな場所、富山湾も近かった。

釣りの楽しみは、さまざま方法を試行錯誤し、自分だけのやり方を見つけながら体験を積み重ねていくことだ。その原体験ともいえる釣りをしたのは、小学四年生のときだった。当時の僕は、週に一、二回、海へキス釣りに出かけていたのだが、その日は釣り餌えに困っていた。父が同伴してくれる週末であれば一パック三〇〇円のイソメを買ってもらえるのだが、自分ひとりで釣りに出かける平日はそれを買う金がない。

金がない、物がないというのは、クリエイティビティーを生み出すとても重要な要素だ。物がなければ自分でつくらなければならない。あるものを利用して、なんとかしなければと考える。

そこで僕は、イソメの代わりに、ヤドカリや小さな巻貝を捕って、エサにすることを思いついた。キス釣りに貝エサを使うなんて、いまだに聞いたことがない。しかし、貝を潰つぶしてエサにしてみると、数こそ少ないものの、イソメで釣るよりも明らかに大きなキスが釣れた。僕はこの「自分だけの発見」に有頂天になった。

釣りは恋愛に似ていると思う。相手のことを推測し、何が重要なのか考える。すると相手は、こちらが投げたものに反応して食いついてくる。ただし、こちらがいくら技術を高めたところで、最終的な決定権は向こうに委ねられる。それは時に腹立たしくもあるが、同時にワクワクすることでもある。

怪魚釣りの原点となると、中学一年のときに釣ったコイだろう。あるとき、近所の川のヌシ的な存在だった大きなコイがかかった。しかし、なかなか釣り上げられない。どうすればよいかと考えて、細い水路に追い込む作戦を思いついた。なんとか網に押し込んだそれは、体長六五センチメートル、体重四キログラムほどの大物だった。

今思えば、たいした大きさではないけれど、それでも当時の僕が普段釣っていた魚の倍

はあった。竿が折れそうな経験をしたのも、魚を引き上げるために川に入ったのも、このときが初めてだ。コイはまだ若く、コンディションもよかったのだろう。記録をとって水に戻すと、それまでの死闘などなかったかのように、さっと泳いで去って行った。これが僕にとって、人生初の大物釣りである。

その後、中学ではブラックバス釣りにはまり、釣り場を求めて自転車で富山県内を走り回った。地図を見て、この場所にブラックバスがいるだろうかと考えながら、行ったことのない場所に自転車を走らせる。あんなに楽しいことはなかった。

怪魚釣りの旅に出るようになった直接のきっかけは、進路と将来について悩んでいた高校三年生の十月、怪魚釣りの先駆者である武石憲貴のりたかさんのホームページに出会ったことだ。そのホームページには、開高健への挑戦を誓う武石さんが、モンゴルに行く話が綴られていた。誰もが二の足を踏むような辺境に向かい、馬を買い、釣り場を求めて草原を旅し、そして最後には大物を釣り上げる。衝撃的だった。しかも、旅の予算はたったの一二万円程度だ。

それまで「怪魚」などというものは、大金を使って、ガイドを雇い、チームを組まなけ

れば釣れないものだと思っていた。でも、学生がアルバイトで稼ぐ程度の金でも行ける……。

まさに「これだ！」と思った。「旅と怪魚釣り」、大学でやりたいことの目標ができた。しかし、進路はどうするか……。

このとき、もうひとつ、興味をもったホームページがあつた。それは山形大学の魚突きサークルのものだ。主宰者の大学院生は、サークルで日本全国の離島を旅しながら、そこで積み上げた魚突きの技術で、アカハタのサンプルをとっていた。さっそくその人にメールを送ってみると返信があり、理学部生物学科でどんな活動をしているのか教えてもらうことができた。

進路の相談をしているうちに、将来的な安定を見据えた進路選択をするよりも、今興味のある魚について学びたいと考えるようになった。そのためには、やはり生物学科のある大学がよい。目標が明確になれば、あとはひたすら勉強するのみ。努力の甲斐あつてか、東北大学理学部生物学科に合格することができた。

大学入学後は、ひたすらアルバイトで資金を貯め、春と夏の長期休暇になると海外に出

て自分でリストアップした怪魚を釣るようになった。

改めて、なぜ怪魚に惹かれたかというところ、そこにクリエイティブティイがあると思ったからだ。もちろん、すべての魚釣りは面白い。小四の頃、キスを貝エサで釣ることを発見したように、どんな魚が相手であっても自分なりのクリエイティブティイを見いだすことはできるし、そこには冒険もあるだろう。

しかし、武石さんのように世界へ目を向けるのであれば、やはり怪魚のようにダイナミックなテーマのほうがいい。僕にとって怪魚とは、大学時代をかけるに値すると思えるほかに、強烈なクリエイティブティイを感じることができる対象だったのだ。釣りに旅という要素が加わることで、現地に行きつくまでの過程や言葉の問題など、乗り越えるべきハードルが増える。また、日本の釣りでは、マダイ用のマダイ針、イシダイ用のイシダイ仕掛けなど、魚ごとに専用の道具があり、細分化されている場合が多いが、そのような道具がない怪魚釣りには、ゼロから生み出す面白さがあるのだ。

通常の釣りとは違い、怪魚釣りにはとにかく時間がかかる。そのため、しっかりと調べをしたり、現地に長期間滞在したりといった時間を確保できるのは、学生時代しかない

と思っていた。しかし気がついてみると僕は大学院に進んだあとも怪魚釣りの旅を続け、釣り雑誌に記事を書いたり、テレビの仕事をしたりするようになっていた。

もともと、自分なりの冒険として楽しんでいた怪魚釣りだが、そこに学術的ともいえる視点を持つようになったきっかけは、魚類学者の多紀保彦氏の二冊の著書『未知の国未知の魚——淡水魚のルーツを求めて』（マリン企画）と『魚が語る地球の歴史』（技報堂出版）に出会ったことだ。多紀氏は、東南アジアをはじめ、アフリカや南米などでフィールド調査を行い、動物地理学における魚類分野の研究をしていた。著書の中では、大陸移動説に基づいて淡水魚のルーツと分布ルートを推察している。

この二冊を読んだとき、僕はすでに七、八回、怪魚釣りの旅を経験していた。最初のうちは、アジアの怪魚、アフリカの怪魚というふうには、点でしかなかったものが、回数を重ねるにつれ、アジアとアフリカで似た種族の魚を釣るといふような経験が増え、点が線につながり始めていた頃だ。

そんなタイミングで、多紀氏の本で動物地理学という分野を知り、自分が漠然と抱いていた疑問や興味は、学問として体系化するところということだったのかと気づかされた。こ

の二冊は、今でも僕のバイブルだ。

さらに、大学の卒業研究のため、四年時に研究室に配属されたことで、自らも本格的な研究の世界をのぞき見ることになった。僕が所属したのは、東北大学大学院生命科学研究所の千葉聡先生（二〇一七年現在は、同大学東北アジア研究センター教授）の研究室だ。千葉先生の専門はカタツムリを材料に生物進化の仕組みを研究するというものだったが、僕が魚にしか興味をもっていないことを知ると、小笠原の淡水魚を調査することを勧めてくださった。選んだテーマは、小笠原と沖繩のナンヨウボウズハゼのDNAを比較検討するというもので、それまで誰も調査したことがない分野だった。

未調査だった理由は、おそらくサンプルの魚を捕るのに多大な労力と手間がかかるからだろう。無論、労力や手間をかけてひとつのことに打ち込むというのは、得意とするところだ。この研究によって、小笠原と沖繩の二地域に生息するナンヨウボウズハゼが、DNA的には交流をもっている可能性があることが判明した。つまりナンヨウボウズハゼは黒潮の流れに乗って、およそ四〇〇〇キロメートルという長距離を移動している可能性があるわけだ。

大学での研究の日々を終えた今、「怪魚」も科学的視点に立ち、大陸移動の歴史から進化の過程を俯瞰ふかんしたら面白いのではないかと考えることがたまにある。現実的に考えれば、サンプルの数がとれない怪魚は、研究の対象にはなりにくい。しかし、もしも「科学」という新たな切り口で怪魚を見ることができれば、ナンヨウボウズハゼの研究成果のように誰も到達していない楽しみを得られるのではないだろうか。

そこで本書では、およそ延べ一〇〇〇日を世界の水辺で過ごしてきた経験をもとに、怪魚釣りの世界を学問的な側面から、僕なりの視点でまとめたいこうと思う。研究者ではない自分が、学問などというのはおこがましいかもしれませんが、怪魚を通じて新たな発見を見いだす喜びや面白さを、少しでも感じていただけたら幸いである。

怪魚を釣る
小塚拓矢・著

発 行：集英社インターナショナル（発売 集英社）

定 価：740 円（本体）＋税

発売日：2017 年 2 月 7 日

ISBN：978-4-7976-8006-5 C0276

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)